走行車輪と軌道系の定常連成応答解析

STEADY-STATE INTERACTION ANALYSIS OF A RAILWAY TRACK AND A RUNNING WHEEL

佐成屋 淳¹⁾, 阿部 和久²⁾, 紅露 一寬³⁾

Atsushi SANARIYA, Kazuhisa ABE and Kazuhiro KORO

1) 新潟大学大学院自然科学	≌研究科 (〒950-2181 新	所潟市西区五十嵐二の町 8050)	
2) 新潟大学工学部建設学科	↓ (〒 950-2181 新	所潟市西区五十嵐二の町 8050,	E-mail:abe@eng.niigata-u.ac.jp)
3) 新潟大学大学院自然科学	≌研究科 (〒950-2181 新	所潟市西区五十嵐二の町 8050,	E-mail:kouro@eng.niigata-u.ac.jp)

This paper attempts to analyze steady state solutions of moving wheel / infinite railway track interaction. The railway track is modeled by an infinite beam supported by springs discretely. The steady state solution is constructed by means of the temporal Fourier transform. In order to cope with the discontinuity in the angle of deflection of Timoshenko beam due to a moving load, in the transformed domain, the steady state response of the infinite rail is described in the form of Fourier series. The moving contact force is also given by a Fourier series to assure the periodicity. The solving equations are given by infinite simultaneous equations for the Fourier coefficients of the contact force. The steady state solution obtained by the present method is compared with time domain solution given by a conventional method. Through numerical analyses, the efficiency of the developed method is evidenced. Moreover, it is found that, since the conventional method cannot attain the exact steady state solution of infinite track, that is involved in the difficulty in setting of computational conditions.

 $Key \ Words$: running wheel, steady-state interaction solution, periodically supported rail

1. はじめに

列車走行による鉄道軌道の動的応答特性の把握は,列車の 乗り心地の改善や地盤振動の低減,軌道破壊の抑制などの観 点から非常に重要となる.これらの諸課題に対して適切な対 策を講じ,その効果を事前評価する目的で,数値モデルによ る解析が積極的になされてきている⁽¹⁾.

なお、上述のとおり鉄道軌道における振動は、一般に列車 走行により発生する.そのため、走行荷重に対する軌道振動 応答の評価が有用な知見を与える.走行荷重下での軌道振動 解析には、これまで様々な解法が提案されてきた.その中で、 軌道系を有限要素により離散化する手法が最も広く用いられ ている.しかしこの場合、通常はレールに打ち切り端が存在 する有限長モデルが用いられることとなる.なお、レール振 動を積分表現式⁽²⁾により記述すれば、レールを無限長ばり として表現することができるが、離散まくらぎ支持モデルに よる場合は、有限個のまくらぎしか考慮できないため、結局

2009年9月30日受付, 2009年11月5日受理

無限長軌道の再現は本質的に不可能である.

走行車輪(車両)と軌道との連成応答特性の把握には,等 間隔に支持されたレールと車輪との定常応答の評価が基本的 事項となる.上述のような有限軌道モデルを用いた時間域解 析による場合,減衰を適切に設定したとしても,定常解に十 分近い結果を得るために必要とされる軌道区間長の設定には 曖昧さが残る.

なお、Floquet 変換^(3,4)を用いれば、無限長の離散支持 レールの解析が、それを構成している最小周期単位(ユニット セル)の離散化により実現可能となる.著者ら⁽⁵⁾は、Floquet 解析法を用いて定点加振を受ける無限長軌道の定常応答解 析を、有限要素(はり要素)の枠組みの下で実施した.また、 走行荷重に対する無限軌道の定常応答解析法も、既往の研究 において試みられている^(6,7).さらに著者ら⁽⁸⁾は、任意の 変動走行荷重に対する軌道系の定常応答解析法を、はり要素 による離散化に基づき構成した.また合わせて、当該問題を 記述する運動方程式の空間方向に Floquet 変換を施したもの と、時間方向に Fourier 変換を施したものとが同一の式を与 え、これにより当該問題がユニットセルの離散化により求解 可能となることを示した.

上述の各解析法において,走行荷重は全て既知量として扱われている.一方,走行車輪と軌道系との連成問題では,両者間の接触力は未知量となる.勿論,文献⁽⁸⁾の手法に依っても,走行車輪との連成解析法を構成することは原理的に可能である.ただし,レールをTimoshenkoばりによりモデル化する場合,移動して行く接触力の作用位置においてたわみ角が常に不連続となる.はり要素による離散化の下,この不連続性を逐次再現することは容易でない⁽⁸⁾.

そこで本論文では、はりのたわみを Fourier 級数により与 え上述の不連続性を表現可能とすることで、走行車輪・軌道 系連成解析法の構築を試みる.以下では、まず文献⁽⁸⁾と同 様の手順により定常問題を導出し、Timoshenko ばりモデル を対象とした具体的定式化を示す.続いて、時間域 Green 関 数を用いた既往の解法⁽⁹⁾による結果との比較を通し、提案 手法の妥当性や、有限軌道モデルによる解析法の問題点など について検討する.

2. 解析手法の構成

2.1. 移動荷重に対するレールの定常応答解

Fig.1 に示す様に、剛な道床上に軌道パッドが離散的に配置され、無限長のレールを支持している直結軌道を対象とする. その上を一定走行速度 c で移動する変動荷重 F(t) が作用する問題を考える. なお、荷重 F(t) は次式の様に構造物の周期長 L (まくらぎ間隔) に律動するものとする.

$$F(t) = F(t + \frac{nL}{c}), \quad (n \in \mathbb{Z})$$
(1)

レールを Timoshenko ばりでモデル化すると、レールの運動方程式は、次式で与えられる.

$$GAK\frac{\partial}{\partial x}(\psi - \frac{\partial u}{\partial x}) + \rho A \frac{\partial^2 u}{\partial t^2} + (k_s u + \eta \frac{\partial u}{\partial t})\delta_L(x)$$

= $F(t)\delta(x - ct),$ (2)
$$GAK(\psi - \frac{\partial u}{\partial x}) + \rho I \frac{\partial^2 \psi}{\partial t^2} - EI \frac{\partial^2 \psi}{\partial x^2} = 0$$

ここで、x はレール軸方向の座標、t は時刻、u(x,t) はレー ルのたわみ、 $\psi(x,t)$ はレール断面の回転角、 ρ は質量密度、 A は断面積、I は断面二次モーメント、G はせん断弾性係数、 K はせん断係数、E はヤング率、 k_s 、 η は支持点のバネ定数 および減衰係数、 $\delta_L(x)$ はレール支持点に特異点をもつ周期 長 L のデルタ関数、 $\delta(x)$ は Dirac のデルタ関数である。 式 (2) の t に関する Fourier 変換より次式を得る.

$$GAK\frac{\partial}{\partial x}(\hat{\psi} - \frac{\partial \hat{u}}{\partial x}) - \rho A \omega^2 \hat{u} + (k_s + i\eta\omega)\hat{u}\delta_L(x)$$

$$= \frac{1}{c}F(\frac{x}{c})e^{-i\omega\frac{x}{c}},$$

$$GAK(\hat{\psi} - \frac{\partial \hat{u}}{\partial x}) - \rho I \omega^2 \hat{\psi} - EI\frac{\partial^2 \hat{\psi}}{\partial x^2} = 0$$
(3)

ここで, ([^])は Fourier 変換を意味する. なお, 上述の様に周 期長 *L* に律動する走行荷重下における定常状態では, 速度 *c*



Fig. 1 Periodic structure subjected to a moving load

での移動座標系の下で周期性を得るので,次式が成り立つ.

$$u(x,t) := u(x+nL,t+\frac{nL}{c}), \qquad (n \in \mathbb{Z})$$

$$\psi(x,t) := \psi(x+nL,t+\frac{nL}{c}) \qquad (4)$$

すると、定常解uのtについての Fourier 変換 \hat{u} は次の周期 性を満たす.

$$\hat{u}(x,\omega) = \int_{-\infty}^{\infty} u(x,t)e^{-i\omega t}dt$$
$$\vec{x}(4) \to = \int_{-\infty}^{\infty} u(x+nL,t+\frac{nL}{c})e^{-i\omega t}dt$$
$$(\tau = t + \frac{nL}{c}) \to = \int_{-\infty}^{\infty} u(x+nL,\tau)e^{-i\omega(\tau - \frac{nL}{c})}d\tau$$
$$= e^{i\frac{\omega}{c}nL}\hat{u}(x+nL,\omega)$$
(5)

式(5)より、当然 $0 \le \tilde{x} \le L$ についても、次式が成り立つ.

$$\hat{u}(\tilde{x},\omega) = e^{i\frac{\omega}{c}nL}\hat{u}(\tilde{x}+nL,\omega)$$
(6)

また、 $\hat{\psi}$ についても同様に、次の周期性が成り立つ.

$$\hat{\psi}(\tilde{x},\omega) = e^{i\frac{\omega}{c}nL}\hat{\psi}(\tilde{x}+nL,\omega)$$
(7)

一方,走行荷重 F(t)は,式 (1)の周期性を持つ.そこで, 荷重位置を x = ct とすると,F(t)は $0 \le \tilde{x} \le L$ において, Fourier 級数により次のように表現できる.

$$F(\frac{\tilde{x}}{c}) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} F_n e^{i\frac{2n\pi}{L}\tilde{x}}$$
(8)

ここで, $F_n = 1$, $F_m = 0$ ($m \neq n$), ($m, n \in \mathbb{Z}$) に対する式 (3) の解を \hat{u}_n および $\hat{\psi}_n$ とおく.また,式(6),(7) を満たす ように, \hat{u}_n および $\hat{\psi}_n$ を次式により与える.

$$\hat{u}_n(\tilde{x},\omega) = \sum_{m=-\infty}^{\infty} a_m^n(\omega) e^{i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})\tilde{x}},$$

$$\hat{\psi}_n(\tilde{x},\omega) = \sum_{m=-\infty}^{\infty} b_m^n(\omega) e^{i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})\tilde{x}}$$
(9)

さらに、 $\delta_L(\tilde{x})$ を次の Fourier 級数により与える.

$$\delta_L(\tilde{x}) = \sum_{n=-\infty}^{\infty} \delta(\tilde{x} - nL) = \frac{1}{L} \sum_{l=-\infty}^{\infty} e^{-i\frac{2l\pi}{L}\tilde{x}}$$
(10)

なお,式(10)より次式が成り立つ.

$$\delta_L(\tilde{x}) \sum_m a_m^n e^{i\frac{2m\pi}{L}\tilde{x}} = \frac{1}{L} \sum_l \sum_m a_m^n e^{i\frac{2(m-l)\pi}{L}\tilde{x}}$$
$$= \frac{1}{L} \sum_m \sum_l a_{m+l}^n e^{i\frac{2m\pi}{L}\tilde{x}}$$
$$= \frac{1}{L} \sum_l a_l^n \sum_m e^{i\frac{2m\pi}{L}\tilde{x}}$$
(11)

以上の準備の下,式(8),(9),(11)を式(3)に代入して,共 通項 $e^{-i\frac{\omega}{c}\tilde{x}}$ を除くと次式を得る.

$$\sum_{m} \{ [GAK(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2 - \rho A \omega^2] a_m^n + \frac{k_s + i\eta\omega}{L} \sum_l a_l^n + GAK b_m^n i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c}) \} e^{i\frac{2m\pi}{L}\tilde{x}} = \frac{1}{c} e^{i\frac{2n\pi}{L}\tilde{x}},$$

$$\sum_{m} \{ [GAK - \rho I \omega^2 + EI(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2] b_m^n - GAK i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c}) a_m^n \} e^{i\frac{2m\pi}{L}\tilde{x}} = 0$$

$$(12)$$

したがって、mに関する各項において次の方程式を得る.

$$[GAK(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2 - \rho A\omega^2]a_m^n + \frac{k_s + i\eta\omega}{L} \sum_l a_l^n + GAKb_m^n i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c}) = \frac{1}{c}\delta_{nm},$$

$$[GAK - \rho I\omega^2 + EI(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2]b_m^n = GAKi(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})a_m^n$$
(13)

ここで、 δ_{nm} はKroneckerのデルタである. さらに、

$$R_m(\omega) := GAK(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2 - \rho A\omega^2,$$

$$S_m(\omega) := GAKi(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c}),$$

$$T_m(\omega) := GAK - \rho I\omega^2 + EI(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})^2$$
(14)

と定義すると,式(13)は次式の様に書ける.

$$R_m a_m^n + \frac{k_s + i\eta\omega}{L} \sum_l a_l^n + S_m b_m^n = \frac{1}{c} \delta_{nm},$$
(15)

$$T_m b_m^n = S_m a_m^n$$

式 (15) より, b_m^n を消去し, a_m^n についてまとめると次式 を得る.

$$a_m^n = \frac{\frac{1}{c}\delta_{nm} - \frac{k_s + i\eta\omega}{L}\sum_l a_l^n}{X_m} \tag{16}$$

ここで, X_m は次式により定義している.

$$X_m(\omega) := R_m + \frac{{S_m}^2}{T_m} \tag{17}$$

式(16)の両辺をmについて和をとると次式を得る.

$$\sum_{m} a_{m}^{n} = \frac{1}{c} \sum_{m} \frac{\delta_{nm}}{X_{m}} - \frac{k_{s} + i\eta\omega}{L} \sum_{m} \frac{1}{X_{m}} \sum_{l} a_{l}^{n}$$
$$= \frac{1}{c} \frac{1}{X_{n}} - \frac{k_{s} + i\eta\omega}{L} \sum_{l} \frac{1}{X_{l}} \sum_{m} a_{m}^{n}$$
(18)

これを $\sum a_m^n$ について解くと次式を得る.

$$\sum_{m} a_m^n = \frac{1}{c \cdot X_n} \cdot \frac{1}{1 + \frac{k_s + i\eta\omega}{L} \sum_l \frac{1}{X_l}}$$
(19)

式(19)を式(16)に代入すると、最終的に aⁿ_mの具体式を得る.

$$a_m^n(\omega) = \frac{1}{cX_m} \left[\delta_{nm} - \frac{1}{X_n} \cdot \frac{1}{\frac{L}{k_s + i\eta\omega} + \sum_l \frac{1}{X_l}} \right]$$
(20)

式 (20) を式 (9) に代入して \hat{u}_n が決定できる.また断面回 転角の係数 b_m^n は,式 (15) 第2式に式 (20) を代入すること で得られる.



Fig. 2 Unit cell of a wheel-railway track system

 $u_n(\tilde{x},t)$ および $\psi_n(\tilde{x},t)$ は,それぞれ $\hat{u}_n, \hat{\psi}_n$ の逆 Fourier 変換により求めることができる.以下では, u_n の導出過程 を示す.

$$u_{n}(\tilde{x},t) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \hat{u}_{n}(\tilde{x},\omega) e^{i\omega t} d\omega$$

$$= \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \sum_{m} a_{m}^{n}(\omega) e^{i(\frac{2m\pi}{L} - \frac{\omega}{c})\tilde{x}} e^{i\omega t} d\omega$$
 (21)

ここで、車輪(荷重)位置を $\tilde{x} = ct$ とおき、 $u_n^b(t) := u_n(ct, t)$ と定義すると、車輪位置のレールたわみは次のように与えられる.

$$u_n^b(t) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \sum_m a_m^n(\omega) e^{i\frac{2m\pi}{L}ct} d\omega$$

$$= \frac{1}{2\pi} \sum_m e^{i\frac{2m\pi}{L}ct} \int_{-\infty}^{\infty} a_m^n(\omega) d\omega$$
 (22)

ここで,

$$A_m^n(\omega) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} a_m^n(\omega) d\omega$$
 (23)

とおくと、 $u_n^b(t)$ は次式により与えられる.

$$u_n^b(t) = \sum_m A_m^n e^{i\frac{2m\pi}{L}ct}$$
(24)

また,最終的なレールたわみ応答 $u^{b}(t)$ は, u_{n}^{b} により次式 で与えられる.

$$u^{b}(t) = \sum_{n} F_{n} u^{b}_{n} = \sum_{n} \sum_{m} F_{n} A^{n}_{m} e^{i\frac{2m\pi}{L}ct}$$
(25)

2.2. 車輪の運動方程式と車輪・レール間の接触力

次に、車輪の運動について考える. Fig.2 に示すように、車輪には車輪重量を含む一定の上載荷重 P が作用しているものとする. すると車輪変位 w(t) は、接触力 F を構成する各調和成分に対する応答の一次結合により次式で与えられる.

$$w(t) = w_0 + \sum_{m \neq 0} \frac{F_m}{M} (\frac{L}{2m\pi c})^2 e^{i\frac{2m\pi}{L}ct}$$
(26)

ここで、woは定数項、Mは車輪質量である.

また,車輪・レール間の接触点におけるバネ定数を k とすると,次式が成り立つ.

$$F(t) = k \left[w(t) - u^{b}(t) \right]$$
(27)

Table 1 Parameters of rail

mass density (kg/m^3)	7880
Young's modulus (GPa)	206
Poisson's ratio	0.33
cross-sectional area (m^2)	64.05×10^{-4}
geometrical moment of inertia (m^4)	1.96×10^{-5}
shear factor	0.34

式 (27) に式 (8), (25), (26) を代入し $F_0 = P$ とすると、最終的に未知量 F_n に関する次の無限連立方程式を得る.

$$w_0 = \frac{P}{k} + \sum_n F_n A_0^n, \qquad (28)$$

$$\left[1 - \frac{k}{M} \left(\frac{L}{2m\pi c}\right)^2\right] F_m + k \sum_{n \neq 0} F_n A_m^n = -kPA_m^0$$
(29)

 $, \quad (m \neq 0)$

実際の解析では、式 (29) を有限項で打ち切り、それを解いて F_n を求める.また、一旦 F_n が求まれば、式 (28) より w_0 を 得る.さらに、式 (8) より接触力F(t)を、式 (25) より荷重 作用位置におけるレールたわみなどを求めることができる.

3. 解析例

3.1. 解析条件

Fig.1 に示した様に、剛な道床上にパッドを介して敷設された無限長レールを解析対象とする.支持間隔はL = 0.6m, パッドは Voigt モデルで表現し、バネ定数、減衰係数はそれ ぞれ $k_s = 110$ MN/m、 $\eta = 1.1$ MN·s/m と設定した.その他 の条件を Table 1 に示す.

3.2. 単位荷重に対する定常応答

本手法の妥当性を確認する目的で,まず単位荷重 P = 1N に対する定常応答解析を行った.荷重走行速度はc = 30m/s, 100m/s の 2 ケースとした.荷重作用位置におけるレールた わみを Fig.3, Fig.4 に示す.図中,横軸は荷重作用位置を示 しているが, Fig.2 に示すように中央部 (0.3m) が支持位置と なっている.

図には比較のため、時間域解法⁽⁹⁾により求めた応答も合わせて示した.こちらの解析では、速度c = 30m/sに対して時間増分5×10⁻⁵sとし、また速度c = 100m/sに対しては時間増分1×10⁻⁵sとして、有限区間に支持点を51点(30m区間)設け、十分定常状態に至った後の応答を抽出した.なお、この解析手法においては時間域のGreen関数を用いているが、これは等間隔glで無限に配置された単位インパルスに対する応答解により構成している.したがって、当該Green関数は空間周期長glの周期解で与えられ、その結果 Fourier級数により容易に導出可能となる.そのため、この周期長glを、隣接領域からの影響が無視できる程度に長く設定する



Fig. 3 Rail deflection at loading position (c=30 m/s)



Fig. 4 Rail deflection at loading position (c=100 m/s)

必要がある.また,既往の解法における当該周期長の影響を 確認する目的で,Fig.3には時間域 Green 関数の周期長 gl を 50m と 100m とした 2 ケースによる結果も合わせて示した. 図では gl = 100m の結果が他と異なっている.この点につい ては後程言及する.Fig.4 においても,既往の解法における 周期長の影響は Fig.3 と同様な傾向を示したため,ここでは, gl = 50m とした結果のみ示している.さらに,本手法によ る解析では,解析結果に基づき逆 Fourier 変換の際,周波数 増分を 1Hz とし,積分域を $|\omega| = 2000Hz$ で打ち切った.ま た,Fourier 級数項においては, $|n| \leq 32$ として計算した.さ らに,式 (29) の連立方程式は,精度を確認の上 65 項までと した.なお,時間域 Green 関数による解析では,計算に約 1 時間 30 分を要した.これに対し本解析に要した時間はわず か 2 分程度と短いものであった.



Fig. 5 Rail deflection at loading position (c=30 m/s)



Fig. 6 Wheel / rail contact force (c=30 m/s)

3.2.1 単位荷重に対するレールたわみの評価

Fig.3, Fig.4 において,本手法の解析結果と既往の結果 (gl=50m)とを比較すると,走行速度によらず両者は良好な 一致を示しており,本手法の妥当性が確認できる.さらに, 両図においてレールたわみは非対称な応答を示しており,最 大たわみを与える位置は支間中央部からずれていることも確 認できる.また,荷重作用位置のレールたわみが支持点通過 時に急変動している様子が確認できる.これは,Timoshenko ばりにおけるせん断たわみの影響によるものであるが,文 献⁽⁸⁾の有限要素による解法では当該挙動が再現不可能で あった.

3.2.2 既往の解法における解析結果の評価

既往の解法における周期長 gl が結果に及ぼす影響を, Fig.3 において確認する. gl=50, 100m における応答は完全な一致 を示さず,支間中央部 (0,0.6m) において大きな差異が認め



Fig. 7 Rail deflection at loading position (c=100 m/s)



Fig. 8 Wheel / rail contact force (c=100 m/s)

られる.本来ならば時間域 Green 関数の周期長 gl は前述し たように長くとる必要があるが,本解析では gl=50m の結果 が本手法との良好な一致を示しており,むしろ長くとり過ぎ ることによる精度低下が認められる.これは,レール支持点 を有限区間にのみ配置していることが影響しているものと考 えられる.以上より,文献⁽⁹⁾の手法により定常応答解を得 るためには,周期長 gl の設定に注意を要することがわかる. 一方,本手法によれば,無限長レールにおける定常解を確実 に得られるという利点がある.

3.3. 走行車輪と軌道系の定常連成応答

次に、1車両の重量を1車輪あたりに換算した値に基づき、 上載荷重をP = 68600Nと設定し、走行車輪との連成解析を 実施した.なお、車輪質量M = 350kg,接触ばねk = 2GN/mと設定した.走行速度はc = 30m/s,100m/sの2ケースとし て解析を行った.荷重作用位置におけるレールたわみをFig.5, Fig.7 に, 接触力を Fig.6, Fig.8 に示す. 各図には比較のため, gl=50m の下で文献⁽⁹⁾の時間域解法により求めた応答も示 した. また, この解析および本手法による解析共, **3.2** と同 一の解像度で計算を行った.

3.3.1 車輪連成下におけるレールたわみの評価

Fig.5, Fig.7 により、本手法と既往の手法とにおけるレー ルたわみ応答に関する解析結果を比較すると、走行速度によ らず両者は良好な一致を示していることがわかる.このこと から、本手法によれば、走行車輪と無限長レールとの連成解 析においても適切に定常解を得られることが確認できる.ま た、車輪直下のレールたわみは、まくらぎ通過前後で非対称 な応答を示している.なお、最大および最小たわみを与える 位置は車輪走行速度により異なり、速度増加と共に、より後 方へと移動している様子が確認できる.さらに、c=100m/s での変動幅は 30m/s でのそれの約2倍となっており、速度が 速くなるにつれて、レールたわみの変動量も大きくなる傾向 が認められる.ただし、レールたわみの平均値は c=100m/s の方が小さい.これは、レールの慣性の影響がより顕著に表 れていることによるものと考えられる.

3.3.2 車輪・レール間の接触力の評価

Fig.6, Fig.8 に示した接触力の応答においては、たわみ応 答と比較して従来法と本手法との差異が高周波成分におい て多少現れているものの、概ね良好な一致が認められ、本手 法の妥当性を確認することができる.また走行速度による 応答の差異は、たわみ応答に比べ、より顕著となっている. c=30m/sの場合では、まくらぎ位置通過直後に接触力が急 減しており、いわゆる輪重抜けが明瞭に現れている.一方、 c=100m/sの場合では、顕著な輪重抜けは発生せず、全体に 大きく変動している様子が認められる.

4. おわりに

本論文では、離散支持された無限軌道上を車輪が走行する 場合を対象に、定常連成応答解析法を構成した.なお、レー ルを Timoshenko ばりによりモデル化する場合、荷重作用位 置においてたわみ角が常に不連続となる.この不連続性を表 現するため、はりのたわみに Fourier 級数を適用した.

次に,一定荷重が走行する場合について,時間域積分表現 式による有限軌道モデルの応答結果と本解析結果とを比較 し,両者が良好な一致を示すことから,本手法の妥当性を確 認した.

さらに,走行車輪が移動する場合の連成解析を試みた.こ の場合においても,時間域積分表現式による応答との比較を 行った.その結果,荷重作用位置におけるレールたわみおよ び接触力共に概ね良好な一致を示したことから,本手法の妥 当性を確認できた. なお,比較に用いた時間域積分表現式による既往の解法 では,時間域 Green 関数が空間方向に周期性を持つ解によ り構成されている.そのため,隣接域からの影響を低減させ るために,Green 関数の周期長を十分長くとる必要がある. しかし,本論文で対象とした定常応答解析では,周期長を長 くとり過ぎることで,むしろ精度低下を生じる傾向が認めら れ,適切な設定には注意を要することがわかった.一方,本 手法によれば,良好な精度の下で確実に定常解を得ることが でき,その有用性を確認することができた.

実際の軌道では、1台車当り2車輪が連行する.この場合、 一般に定常応答解が厳密には得られなくなるが、本解析による1車輪モデルや、軸距をまくらぎ間隔の整数倍と設定した ケースでの解析によっても、基本的な応答特性を十分把握で きるものと考えている.

参考文献

- Knothe,K.L. and Grassie,S.L. : Modelling of railway track and vehicle/track interaction at high frequencies, *Vehicle Sys. Dyn.*, 22, 209-262, 1993.
- (2) 阿部和久,古田 勝:時間域積分表現式による軌道振動解析法,構造工学論文集,43A,365-372,1997.
- (3) Clouteau, D., Elhabre, M.L. and Aubry, D. : Periodic BEM and FEM-BEM coupling, *Comput. Mech.*, 25, 567-577, 2000.
- (4) Clouteau, D., Arnst, M., Al-Hussaini, T.M. and Degrande, G. : Freefield vibrations due to dynamic loading on a tunnel embedded in a stratified medium, *J. Sound Vib.*, **283**, 173-199, 2005.
- (5) 阿部和久,古屋卓稔,紅露一寛:まくらぎ支持された無限長レールの加振応答解析,計算数理工学論文集,7(1), 25-30,2007.
- (6) Metrikine, A.V. : The steady-state response of a periodically inhomogeneous model of a railway track to a moving load, *Envir. Vib.*, Takemiya(ed.), 103-113, 2005.
- Mead,D.J. : A new method of analyzing wave propagation in periodic structures; Applications to periodic Timoshenko beams and stiffened plates, *J. Sound Vib.*, 104, 9-27, 1986.
- (8) 阿部和久,古屋卓稔,紅露一寛:走行荷重を受ける軌道 系の定常応答解析,計算数理工学論文集,8,7-12,2008.
- (9) 阿部和久,森岡泰助,古田 勝: Timoshenko ばりを 用いた軌道振動系のモデル化,構造工学論文集,44A, 367-374,1998.